

第 33 期社会教育委員会議 提言書

世代をこえた「つながり」づくりについて

第 33 期（令和 3 年 6 月 1 日～令和 5 年 5 月 31 日）

富士見市社会教育委員

	氏名	所属
議長	古澤 立巳	資料館市民学芸員
副議長	佐々木 眞理子	子ども大学ふじみ実行委員
	荒川 照子	元民生児童委員
	京谷 恵子	元公民館運営審議会委員
	吉田 徹子	地域子ども教室
	蘇武 伸吾	淑徳大学教授
	渡邊 知広	生涯学習推進市民懇談会参加者
	吉田 和江	文化協会
	内海 幸一郎	校長会
	富士 伸	公募

目次

1	はじめに	3
2	富士見市の現状	3
3	「つながり」の大切さについて	5
3-1	3つの観点から見る「つながり」の必要性	5
①	自己成長の観点から	5
②	相互成長の観点から	6
③	「居場所づくり」という観点から	6
3-2	世代をこえる重要性	6
①	「世代間ギャップ」を認め合う	6
②	未来に向けた「つながり」のため	7
3-3	富士見市生涯学習推進基本計画から	7
4	「様々な世代を包む、ゆるやかな関係づくり」	7
①	諸活動への積極的な支援と広報	8
②	オープンな雰囲気づくり	8
③	負担感の軽減	8
④	継続の仕組みづくり	9
⑤	子どもたちを中心に考えた活動	9
5	具体的な取組の提案	9
①	情報を届ける仕組み	10
②	参加しやすい仕組み	10
6	おわりに	13

1 はじめに

第33期社会教育委員会議では、世代間のつながりの希薄化に焦点を当て検討していくことにしました。各委員が日頃携わっている社会教育活動を振り返った時に気が付くのは、30代や40代といった、いわゆる現役世代の社会教育活動への参加が60代や70代などの他の世代と比較して少ないという現状です。

特定の世代の社会教育活動の参加率が低いということは、つまり世代をこえたつながりが形成できていないという可能性が考えられます。世代を問わず、他者とのつながりを持ち、関わり合いを持つことは重要なことではないでしょうか。様々な世代の方が一緒になって活動すること、つながりを持つことでしか得られない気付きや学びがあります。人生100年時代と言われる現代において心豊かに生きていくためには、世代をこえたつながりは大切なものであると私たちは考えます。

しかし、富士見市の社会教育活動を見ると、上述のとおり、世代をこえたつながりについて、十分に築かれているとは言い難いのが現状です。世代を問わず、誰もが一緒になって活動できる場がなくなってしまうのも、その要因の一つだと言えるのではないのでしょうか。

以上のような現状を鑑み、第33期社会教育委員会議として、世代をこえたつながりづくりについて検討し、提言書としてまとめます。

2 富士見市の現状

地域で行われている諸活動について、参加者の固定化や高齢化、若手人材の確保等が課題として多く指摘されています¹。これは各種アンケート等からも見ることができます。令和元年度に実施された生涯学習に関する市民アンケート²では、現在行っている活動を問う設問に対し、23%が「活動を行っていない」と回答しています。一定程度の市民が生涯学習活動に取り組んでいないことが伺

¹ 『令和4年度（令和3年度実施事業）事務事業点検・評価報告書』「基本方針Ⅱ学びあう地域社会をめざす教育の推進」で、複数課から課題として挙げられている。例えば「各種事業の参加者が依然固定化している」（49頁）、「子育てサロン：若手保育サポーターの確保」（52頁）など。

² 生涯学習に関する市民アンケート

調査対象：①市内在住で満18歳以上の男女1,000名を無作為抽出

②公共施設利用者（公民館・交流センター・コミュニティセンター）120部

調査時期：令和元年11月1日（金）～11月29日（金）

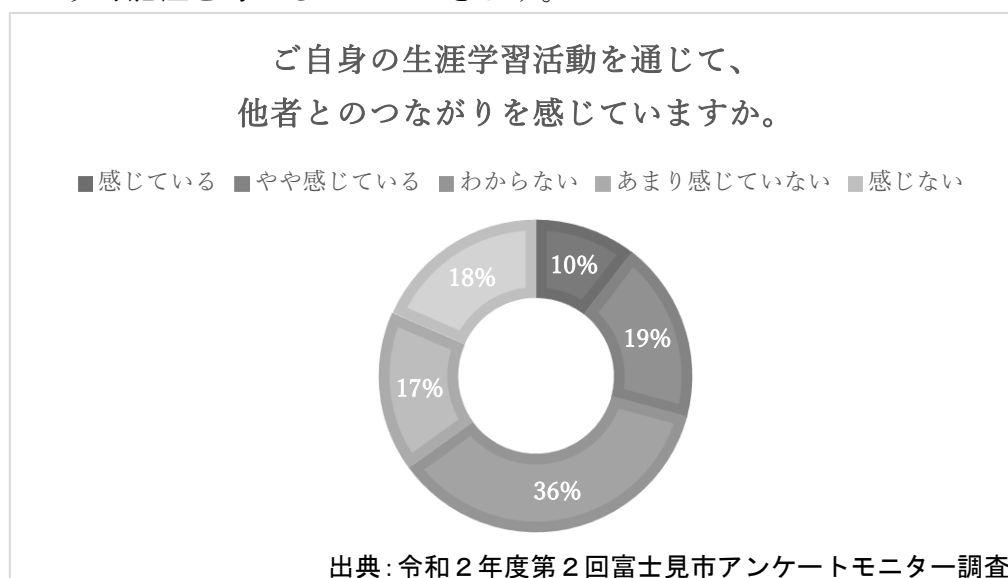
調査方法：①郵送発送・郵送回収（同封の返信用封筒）無記名アンケート方式

②公共施設窓口にアンケート用紙を設置・窓口回収

えます。また、その理由については、43%が「仕事が忙しくて時間が無い」、21%が「家事・育児が忙しくて時間が無い」と回答しています。

仕事や家事・育児が生活の中心になる世代については、生涯学習活動に参加する際のハードルが他の世代よりも高いと考えることができるのではないのでしょうか。

令和2年に実施されたアンケートモニター調査³では、「ご自身の生涯学習活動を通じて、他者とのつながりを感じていますか。」という問いに対し、7割の人が「わからない」「あまり感じていない」「感じない」と回答しています。中でも特に注目したいのは、「わからない」と回答している人が、36%にも上るということです。「わからない」と回答するという事は、普段の生活の中で他者とのつながりを全く意識していない、そもそも他者との関わりについて関心がない、という可能性を考えることができます。



他者とつながることのメリットを知らない、他者とつながりたいと思っているがつながりを築けない、そういう人がいるのであれば、社会教育の観点から、対策を考える必要があります。

人と人とのつながりの中でこそ得られるものもあるでしょう。

生涯学習活動を通してつながりを築くことのメリットを知ってもらうこと

³ 令和2年度第2回富士見市アンケートモニター調査

調査対象：富士見市アンケートモニターに登録された市民467名

調査時期：令和2年8月13日（木）～令和2年8月19日（水）（7日間）

調査方法：WEB調査

また、他者とのつながりを必要と考えるか、不要と考えるか、そしてどのようなつながりを求めるか、それはその人の置かれている環境やライフステージなどによって変化するものです。

つながりを持ちたい、必要だ、と思ったその時に、その人がつながりを築けるような環境を整えること

生涯学習活動を支援するその一環である社会教育においては、この2点が求められるのではないのでしょうか。

3 「つながり」の大切さについて

3-1 3つの観点から見る「つながり」の必要性

人とのつながりを持つということ、他者と関わり合うということは、そこに「居場所」をつくるということだと考えます。「居場所」、「自分はここにもいいのだ」と思える場所があることは、非常に重要なことではないのでしょうか。

公民館で、図書館で、自宅で、様々な生涯学習活動が行われています。心豊かな人生を送るため、一人ひとりが生涯学習活動に取り組むことは大切なことです。しかしその学びを「個」で終わらせることなく、他者とのつながりを形成していくこと、生涯学習活動を通して「居場所」を見つけることが、なによりも大切なことではないのでしょうか。

本提言書では、3つの観点から「つながり」の重要性を整理しました。

① 自己成長の観点から

他者とのつながることによって、視野を広げて物事を見ることが出来ます。新しい気づきを得るきっかけにもなり得るのではないのでしょうか。自分の日常内で築く関係の、その枠を飛び越えて他者とのつながることができれば、自分だけでは発見できないような気づきを得ることが可能です。また視野を広げることでも、様々な考え方や状況を受け入れる力を高める効果にも期待できるのではないのでしょうか。

② 相互成長の観点から

人とコミュニケーションをとる中で、人に教えてもらうありがたさを知り、人に「教えて」と頼ってもらう喜びを知ることができます。また、他者から感謝されることの感動に気付くことができ、自己成長のきっかけへとつながっていきます。そして、人とつながることが自己成長のきっかけとなるように、それは相手にとっても成長の機会を与えているということです。他者とつながることで、自分自身だけではなく、相互に高め合うことが期待されます。

③ 「居場所づくり」という観点から

すべての人にとって、「居場所」があるということは、幸せなことではないでしょうか。他者とつながることにより、同じ気持ちや環境について理解し合うことができます。また、組織やコミュニティに対して帰属意識があれば、安心感や自己肯定感を得ることができます。人は他者とつながることで、そこに「ここに居てもいいんだ」と思える場所、居心地がいいと思える場所、すなわち「居場所」をつくることができるのではないのでしょうか。

3-2 世代をこえる重要性

他者とのつながりの中でも、私たちは「世代をこえた」つながりを特に重視したいと思います。それは、「世代間ギャップ」の理解、そして未来に向けた「つながり」、この2点からです。

① 「世代間ギャップ」を認め合う

人々が集い、同じ目的を持って交流することは、お互いに新しい刺激を生み出す効果があるものです。しかし、社会背景や生活環境などの違いから、物事に対する考え方の相違が存在します。この相違は同世代間においてよりも、異世代間においての方が大きいものであると言えるでしょう。この「世代間ギャップ」を、理解することも大事なことです。まずは認め合うことから始めることが大切ではないのでしょうか。

社会教育において重要な要素の一つである「興味関心」について、様々な世代が認め合い、共有し合う場をつくることができれば、今までにない考えやアイデアなどが生まれる可能性が広がるのではないのでしょうか。「世代間ギャップ」をこえて、より大きな気付きや学びを得ることを期待することができます。

② 未来に向けた「つながり」のため

現在富士見市では様々な社会教育活動が行われています。しかし「富士見市の現状」で述べたように、次なる担い手の不在により、次世代へとつながることなく、そこで活動が途切れてしまう恐れのある活動も少なくありません。意志ある人達によってはじめられた活動が途切れてしまうのは、とても残念なことであり、富士見市の社会教育にとって大きな損失と言えるでしょう。社会教育に資する活動が途切れることなく、次の世代にも引き継がれていくようにするためにも、世代をこえたつながりを形成することは、大切なことだと言えるのではないのでしょうか。

3-3 富士見市生涯学習推進基本計画から

富士見市の社会教育行政についても確認しておきます。「市民一人ひとりが、安心して生活し、行政との協働のもとで、いつでも、どこでも、いつまでも自発的に学習をすすめ、そのことを通して、すべての市民が互いを尊重し、心豊かに暮らせるまちづくりの実現を目指す」ことを基本理念として、富士見市生涯学習推進基本計画が策定されています。

生涯学習とは、各人が自発的意思に基づいて行うことを基本とするものです。しかし、富士見市が掲げるのは「心豊かに暮らせるまちづくりの実現」であり、それは個人で達成されるものでは決してありません。「まちづくり」である以上、個人ではなく地域住民が一丸となって成し遂げていく必要があるのではないのでしょうか。

富士見市が掲げる理念を達成するためにも、まずは、市民一人ひとりが生涯学習に興味関心を持ち、生涯学習活動に取り組むこと。そして、学びから得た成果を個人に留めることなく、社会に還元していくこと。つまり、他者とのつながりを形成していくことが重要となるのです。

4 「様々な世代を包む、ゆるやかな関係づくり」

生涯学習活動を通して「居場所」を見つけることは大切なことだと言えるでしょう。「ここにいてもいいんだ」と思える居場所が、個人の活動の中に、他者との関わり合いの中に、誰もが持てるような社会になってほしいと思います。個人の生涯学習活動を通じた居場所づくりを否定するわけでは決してありませんが、上で述べた通り、社会教育の観点から、他者とのつながりの中にある居場所づく

りを推進していきたいと私たちは考えます。

どのような居場所があれば世代をこえた人々がつながりを持てるのでしょうか。

第33期社会教育委員会議で検討した結果として、「様々な世代を包む、ゆるやかな関係づくり」が必要であり、そのために以下の5点が重要と考えました。

① 諸活動への積極的な支援と広報

つながりづくりについて考えた時に、まずは、既存の活動を盛り上げること、魅力を高めることが必要ではないかと考えます。また、社会教育活動に積極的・前向きな市民と行政が一丸となって、その活動を共に活発化させていくことが求められるのではないのでしょうか。併せて、実際に活動している人のいきいきとした様子を広く周知する。そして、様々な世代の人に興味を持ってもらい、そこから活動の輪を広げていく。そうすれば、より多くの世代の人に参加してもらいきっかけへとつなげていくことができるのではないのでしょうか。

② オープンな雰囲気づくり

活動や団体の寛容性を高めることも大事なことではないのでしょうか。同質性が保たれていることに心地よさを感じてしまうため、同じ年代、同じ考え方の人同士での交流で終わってしまいがちで、排他的になってしまう団体や活動もあります。しかし、それだと旧態依然とした組織になってしまいます。新しい人は、新しい発見をもたらしてくれる人、という考え方を持つことが求められるのではないのでしょうか。また行政として活動や団体の運営に携わっているのであれば、新しい人、あらゆる世代の人が参加しやすい雰囲気づくりも大切です。行政に求められる支援の一つであると言えるでしょう。

③ 負担感の軽減

新しいことを始めるということは、どんなことであれ心理的負担が伴うものです。また、つながりを築くための活動が、義務感や負担感を生じさせるものであれば、そこに参加したいと思う人はいないでしょう。仕事や子育て等、日々の生活を忙しく過ごしている人にも参加して貰いやすい工夫が必要です。できる人が、できる時に、できる範囲で参加する、というゆるやかな仕組みづくりが求められるのではないのでしょうか。

④ 継続の仕組みづくり

なにかに興味を持ち活動や団体に参加したときに、すべての人が継続していくわけではありません。「楽しい」と思う人が続けて活動していくことで、つながりが形成されていくのではないのでしょうか。「楽しい」と思う感覚は人によりそれぞれでしょう。ゆるやかな仕組みの中であればこそ、そこでより多くの人につながりを築いてもらい、そして継続してもらうためには、まずは参加して貰うためのさまざまな「きっかけ」と、そして「楽しさ」があることが必要だと言えるのではないのでしょうか。

⑤ 子どもたちを中心に考えた活動

他者とつながること、地域で活動することの土壌を子どもたちの中に作るためにも、子どもたちを中心に考えた活動は重要であると言えるでしょう。活動を子ども自身が楽しむことはもちろん、「大人って楽しそうだな」と感じてもらうこと。親子で参加してもらって、家庭で「今日楽しかったね」と共有してもらうこと。そういったことの積み重ねの中で、自分も将来そういう大人になりたいという思いが芽生え、他者とつながることを当たり前を感じるサイクルが生まれていくのではないのでしょうか。そのためには、地域と家庭、学校とが連携して、子どもたちを地域で受け入れる環境を整備していくことが重要です。

また、子育てをしている世代とつながりを築くためにも、子どもたちを巻き込むことは有意義と言えるでしょう。たとえ小さなものであっても、共通した目的意識や課題認識があった方が、人と人とのつながるきっかけとしては機能しやすいのではないのでしょうか。

5 具体的な取組の提案

世代をこえた人々がつながりを持ち、そのつながりの中で充実感を得るためには、どのような生活サイクルであっても参加できる「居場所」であることが大切です。強制力のない、その人自身がその「居場所」を選択できること。そして、その「居場所」に拘束されないこと。つまり、「様々な世代を包む、ゆるやかな関係づくり」が必要であると言えるのではないのでしょうか。

そして「ゆるやか」であるからこそ、求めている人にしっかりと情報が届くような仕組みと、そのつながりに対して多くの人に「楽しさ」や「おもしろさ」といった魅力を感じてもらえるような仕組みづくりが重要であると言えるでしょう。

①情報を届ける仕組み

適切な情報発信はとても重要であると言えます。特に、さまざまな世代を巻き込むためには、検索した時にヒットするよう、ホームページやSNS上での情報発信をしっかり行っていくことが必要でしょう。スマートフォンが広く普及した今、興味がある人はまずインターネットやSNSで検索をして情報を収集します。その時にしっかりと求めている情報がヒットすること。そしてヒットした情報が魅力的に写ること。多くの世代、特に若い世代を巻き込む上では大切なことだと言えるでしょう。

また、「できる人」の「できる時」に、一步を踏み出す「きっかけ」を提供するという意味においても、その人が興味を持てるような情報が入るよう、細やかな情報発信が必要です。事前に情報を得ることができれば、活動に参加することに対する心理的なハードルを下げることも期待できます。参加することへの負担感を減らすためには、インターネット等を活用した情報発信も大切であると言えるでしょう。

情報発信の頻度と質、そして媒体について、今の時代に即した方法をとることが重要です。

②参加しやすい仕組み

誰でも参加しやすい、オープンな雰囲気であるということは、事情が異なる様々な世代の人に参加してもらうためには、とても重要なポイントであると言えるでしょう。

事例1 公園管理などを行っている団体の例

この団体では、代表者交代に際し次の点に留意して進めていった。

- ・参画メンバーが納得する場で決定していくこと
- ・後継者に「自分の分身」を探さないこと／求めないこと
- ・団体のあり方は承継するが、やり方は承継しない（押しつけない）こと

透明性があることや、方法を押し付けないということ、これは代表者の交代というだけでなく、世代をこえて、新規参入を促していこうと考えた時にも、留意すべき点であると言えるでしょう。

事例2 活動方法を工夫した例

オンライン会議ツール ZOOM で開催された講演会に参加した。ZOOM には慣れていなかったが、主催者に相談したところ 20 分前から説明があり、スムーズに参加することができた。

移動手段がないため参加できない、夜は外出できない、という場合もあるでしょう。ZOOM 等オンラインの活用により、誰でも参加しやすい環境を整えていくことも、これからは必要とされることでしょう。

事例3 小学生に向けた講座を開催している団体の例

活動立ち上げ当初、地域の大学や社会教育関係団体等から数名ずつ担当者を選出し実行委員会を形成していた。

数年経過した頃から参加児童の保護者に参加を呼び掛けたところ、毎年何名かは実行委員会に参加するようになった。保護者たちは現役の子育て世代ということもあり、児童たちが興味を持っている内容を的確に把握し、積極的に意見を述べてくれた。またその子ども達も、事業に参加した翌年に受付を担当してくれたり、参加児童のフォローに入ってくれたり、積極的に手伝ってくれた。

当初から形式的に参加していた実行委員のメンバーは、触発されることが多くなり、とても楽しく活動できている。

保護者も参加しやすい雰囲気や、活動のあり方を構築したことで、年齢の高い層と子育て世代の層との交流が図れたという事例です。

- ・子どもを中心に考えた事業において、その保護者を巻き込んだこと
- ・働いている保護者であっても参加できる活動開催日を調整していること
- ・子どもの参加も受け入れる雰囲気を作っていること
- ・「できる人が、できる時に」を方針としていること

これらの点は、どのような世代であっても受け入れる姿勢を持つために必要な工夫であると言えるでしょう。

事例4 子ども食堂の例

仲間をどうやって増やしていこうかと考えた時に、参加している子どもたちを仲間に入れていきたいと考えた。子どもたちや世帯を、身近な地域で支えていきたいという思いがある。子どもたちに参加してもらって、なにかをしてもらうだけの立場ではなくて、自分たちも誰かのために活動する、というやり取りの機会としたいと考えている。

参加者である子どもを、単なる参加者で終わらせず、活動の担い手として巻き込もうとしている事例です。

- ・参加者である子どもを担い手として活動に巻き込んだこと

子どもを対象とした活動において、活動が何年かに渡ると、例えば小学生だった子どもが中学生や高校生へと成長しています。高校生であれば大人とほぼ同じ働きができるし、中学生であっても小学生と一緒に遊ぶことができるし、小学生であっても下の学年の子の相手をすることができます。子どもが参加していることで、その子が大きくなったときに、運営側として参加してもらうサイクルを自然と築くことができます。

また、事例3と事例4に共通している重要なポイントとして、以下の点に注目したいと思います。

- ・子どもや新しく参加した人に対して役割を与えていること

新しく参加する人を認め、仲間として迎え入れる仕組みがあるということです。この様な仕組み、態勢があれば、活動に対して楽しさややりがいを感じることができます。また、「できる人が、できる時に」という拘束力の低さにより、無理のない範囲で活動することができるのではないのでしょうか。

情報を届ける仕組みを築くこと。そしてオープンな態勢、時代や内容に合わせた活動方法の工夫など、参加しやすい仕組みを築くこと。「様々な世代を包む、ゆるやかな関係づくり」を支える仕組みを作ることができれば、様々な世代が参加しやすく、継続性のある活動となっていくのではないのでしょうか。

6 おわりに

先日、会議で配られた公民館だよりなどを見直しました。各館で取り組んでいる社会教育や生涯学習などが、様々な形で次世代につなげていくことの大切さを、あらためて認識しました。この提言を通して、世代間の交流の場を、市民と行政が連携し合う中で、意図的に行う必要性も痛感しました。情報を得る新たなツールが進む社会の中で、富士見市の社会教育が未来につながるためにも、この提言内容が具現化され実践されて行くことを願っています。

2年間にわたって、この提言をまとめることができたのも、活発な意見や提唱をしていただいた社会教育委員の皆様のご協力と担当職員の皆様のお力添えの賜物です。今期の議長として感謝いたします。

(古澤 立巳)

「子どもは地域で育てる」という言葉が盛んに言われた時があります。しかし子育て世代の親たちが地域社会にとけ込むのは、なかなかハードルが高いものです。行政が何かきっかけ作りの事業を提案してくだされれば、地域で活動している団体が協力し世代をこえたつながりが生まれるのではないのでしょうか。

(佐々木 真理子)

人が集まると、五感のコミュニケーションをとる事ができる。

しかし、今はオンライン化が進み、どこにいても人と人がつながる時代になってきている。

人間関係の築き方に変化が感じられる。今こそ地域での世代を越えた人たちの活動（イベント、サークル等）がとても大切であると思っている。時には身近なところで声を掛け合ったり見守ったりして助け合うことが、やさしさや勇気を育んだりする事につながる。それぞれの世代から様々なことを学ぶ機会ができる。世代を越えお互いをかけがえのない存在だと理解し、将来につながってくれることを願っている。

(荒川 照子)

かつて子育て真っ最中の時、私は大人の学びの場として公民館での社会教育活動に参加し、その中で同年代ではない多くの人に出会いました。多くの刺激がありたくさんのことを学ばせていただきました。私にとって公民館は本当に大

切な場所です。学びとしての生涯学習は、一人で完結させることもできますが、いろいろな人との有意義な関わりの中で、自分の成長が引き出されることがあると実感を持って感じています。これからも、人生の先輩とも、後輩とも楽しく有意義に関わりあっていきたいと思えます。

(京谷 恵子)

時代の変化により、人との「つながり」の作り方が変わってきました。人が幸せに暮らしていくには、人との「つながり」を持つことは大切です。50歳代後半の私ですが、新しい事に苦手意識を持たずに、挑戦していきたいと思えました。

(吉田 徹子)

Z世代といわれる若者が数年後には時代を担う。AI活用が広がり生活が変化することが予想されるが時代が変わろうと豊かな暮らしには人と人との関りは大切である。誰一人取り残さないまちづくりについて住民と行政が一丸となって取り組む必要性について様々な立場で考察できた本委員会活動は私にとって大きな財産となった。

(蘇武 伸吾)

事務局を務められた担当課の生涯学習課の方々のご尽力のもと、世代を越えたつながりづくりについて、異なるバックグラウンド・経験を有する委員の方々とともに深く考える機会を与えていただきました。隗より始めよで、自身も率先して地域での活動においてつながりづくりを進めていきたいと思えます。

(渡邊 知広)

熱心に取り組まれる委員の皆様のご意見に反省しきりです。毎回気づかされることが多く今更ながら地域との関係の希薄さを痛感。自責の念に駆られています。こんな己が提言書作成に関わることなど申し訳ない気持ちでいっぱいです。

(吉田 和江)

市民の学ぶ環境や人のつながりづくりなどをテーマに本市の社会教育のあり

方について様々な角度から意見が交わされる中で、あらためて「地域の学校」としての役割についても振り返るよい機会となりました。将来、地域の担い手となる子どもたちに地域やそこで暮らす大人との多様な交流の場を一層工夫して作ってまいりたいと考えております。

(内海 幸一郎)

社会教育委員会に参加させていただいて、富士見市を安心して住みやすくするため多くの人々が動いており、沢山の活動機関で活動していることが知ることが出来ました。その中で色々な角度、立場からの話が聴けた事はとても勉強になりました。日々、当たり前のように生活していますが誰かの行動や支えがあり日々の生活している事を改めて実感致しました。今後、生活していく中でこのような活動が周知されるように伝えていきたいと思っております。

何かお手伝いできる事があれば引き続き協力していきたいと思っております。ありがとうございました。

(富士 伸)